
世界は続くよ、どこまでも

スープ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界は続くよ、どこまでも

【著者名】

スープ

【あらすじ】

現代病を患つた妹と、その兄との日常の一幕。拒絶しようとして、世界は続くよ、どこまでも。

大学からの帰り、俺はリンの住処に寄つた。
訪れる度に病的な度合いを増していく彼女の部屋だが、今回の変化は病的すぎた。

「あ、タカフミ、きててくれたんだ」

あまりの変わりように対応出来ず、その場に呆然と佇む俺を尻目に、彼女は軽快な足音をたててかけてくる。

「リン、その……みえるのか……？」

「ん？ なにが？」

ぽけ、と聞き返すモンスター。怪物的な話になるが、俺がここを訪れなかつたわずか一週間で、この変化は既に彼女の日常に取り込まれたらしい。

「いや、ほら。明かり」

部屋の奥でぽつりとともにされていたロウソクを指差す。室内の明かりはそれだけで、実質暗闇といつて遜色ない。

「うん、みえるよ」

しかし、さも当然というよつにリンは言った。さ、入つて入つてと促されて、俺は釈然としない気分をわだかまらせつつも、魔窟に突入することを決意する。

「タカフミ来てくれるの久しづりだね。最近調子はどう？」
すすめられるままに、ぼんやりと輪郭のわかる椅子を手さぐりで確かめ、座る。

「一人の引きこもりを除いてすべて平常」

「む、手厳しいなあタカフミは。それ、私のことだよね？」
「そりゃまあ……」

当然だけど、と続けよつとして口をつぐんだ。ロウソクの仄かな光を反射する、鈍色の物体が視界に入ったのだ。そう、それは、なんていうか、一言でいうのなら、おおぶりの……か、金槌？

俺はまだ死にたくないよ。

「リン、そのロウソクの隣の物騒なブツはなにかな」「物騒？」

「この女、感覚が麻痺してやがる。

「ああ、タカフミ知らないんだ。ロウソクのね、火を消すための道具なんだよ」

なんでも、それでロウソク」とたきつぶすらじこ。なんとも殺伐とした消灯である。

「そんな物騒なことしなくても……蓋かなんかをかぶせれば」

「……タカフミ、そういうこと、言わないでよ」

リンは冷ややかな声で口を挟んだ。どうやら、彼女のボーダーラインを超えてしまつたらしい。

「……その程度でもだめなのか？」

「無理。酸素がどうのこうのって時点で、充分に科学的だよ

「そうなのか。悪かった」

リンは、病気を患つている。

科学的なものを忌避する病。国民のうち千人に一人が患つているという統計が出て以来、一般に認知されるようになった精神病。精神病とはいっても、実際は機械を使うことにわずかな抵抗を感じる程度で、日常生活にはなんら支障なく、そのまま気付かずに一生を終えることが多い。

だが、リンのような重症患者となれば、コトは違つてくる。

一通りこの部屋を見渡してみれば一目瞭然だ。科学を連想させるものなんて、てんで存在しない、病的な部屋。ついに蛍光灯をも駆逐し、どうやらリンの部屋づくりはコンプリートしたようだ。

「難儀だよなあ

「そもそもないよ。火をつけるのには困らないし」

マッチ箱をロウソクの光に照らしてみせる。

「マッチはいいのか

「うん。オーケイ」

NGかOKかは彼女なりの基準、即ちボーダーラインがあるようだが、俺にはいまいちよくわからない。マッチなんてかなり科学的な気がするけど。マッチの帽子部分に含まれた塩素酸カリと、箱に塗られた赤リンが摩擦することによって爆発し、赤リンが発火してマッチが燃えるって仕組みを……連想したりしないのかな。

「しないよ。タカフミ、そんなちやんこな発想してると、いつか脳みそに液体ちり……」

突然言葉を区切るリン。

「タカフミ」

「ん?」

「ちょっと耳ふさいでて」

「ああ、わかった」

余裕のない口調で頬まれて、言われた通りにする。

リンは、時折こうしたミスを犯す。自分の発言から科学的なものを連想してしまい、吐き気を催すのだ。

耳をふさいでも、完全に音を遮断することは出来ず、俺は結局リンの嘔吐を聞かされるはめになり、非常に微妙な気分を味わった。「はあ、すつきり吐いちゃった。ごめんね、タカフミ」

「いや、きにしてないよ」

口から「マカセ嘘八百。

「あ、そうそう。リン、新聞読んだかい?」

ふと、今朝読んだ記事を思い出した。

「いつの? 今日?」

「今日」

「……えっと、いぬねこマーダーハウスのやつ? あの事件気分悪い

いよね

「そりや昨日だ」

「じゃ、読んでない」

どうも、リンの時間感覚は常人のそれとはズレているところがある。ひやんと寝る時間には寝て、起きる時間には起きているみたい

だけど、日常のリズムを刻むにはそれだけじゃダメということか。この部屋には、テレビはおろか、時計も存在せず、おまけに外の高層ビル群が視界に入らないようにと、窓は黒い布で覆われている。時間を知る術は、部屋の片隅においてある巨大な砂時計だけでもかく、完全に外の世界とは隔絶されているのだ。

「で、タカフミ、何か耳寄りな事件なの？」

「まあ、それなりに。『科学なき世界』の連中がね、永野県の研究室を襲撃したって」

科学なき世界とは、リンと同じ病気の重症患者たちによる集団で、端的に言えば過激派とでも言えばいいだろ。彼らは科学によつて世界が解明されるのを拒み、国内各所の研究室へ破壊活動をかけている。

「永野の研究室つて、もしかして」

「そう。特定生命科学研究所。まあ人体実験室つて方が馴染み深いだろうけど」

永野の山奥に広い敷地を持つ研究室。人体にまつわる広範な研究をしており、とりわけ脳に関する研究成果は飛びぬけている。結構危なつかしい新薬の臨床試験を行う設備を併設しており、それもひつくるめて人体実験室と揶揄されることが多い。

「ふうん。また大胆なことしたね」

「厄介な連中だよな、全く」

重症患者だろうと、リンのように生活を 健康的とは決していいにしろ 平穏に送つていいやつだつて。いる。

そいつらからしてみれば、全くもつていい迷惑だ。リンが自宅から追い出されてこんなところに住んでいるのも、元はといえば彼らのせいなんだし。

本人は、自分の自由に出来るこの部屋を、気に入つてゐるよつではあるけど……やっぱり、家族は一緒に住みたいものだ。

「で、タカフミ。今日来てくれたのはそれと関係あつたの？」

「あ、ああ。そうだ。ちょっと気になることがあつて。……あーい

や、久しぶりにリンの顔を見たかつたつていうのも当然あるけど
「気、使わなくていいよ。タカフミ来てくれるだけで嬉しいもの。
で、気になることって？」

「うん、それなんだけど。彼らはぜひして永野を攻撃したんだろう
「どういうと？」

「いや、永野は彼らの主義とはあまり関係ない気がするんだよ」

『科学なき世界』というのは、自然崇拜主義の団体としての側面を持つている。

大地を成分から解明するのを非難し、足の裏の感触だけで大地の偉大さを味わうべきだ　　といつような、半ば自然愛護団体のよつな感じだつたと思うんだけど。

「タカフミ、それは勘違いだよ」

「どういうこと？」

「彼らは未知のものを解明するのが嫌なんだ。これは私見だけどね、科学がこうも発展して、世界の解明がここまで進んでしまったから、不安になつたんだよ。　段々と、自分たちの暮らす世界の底がみえてしまうみたいでさ。だから神秘は神秘のままほかつておこうつていうのが彼らの主義」

自分のことを話すように、リンは言つ。実際、そうだろう。
「今まで自然研究の方ばかりにちよつかいかけてたから勘違いされてるんだろうけど、私からすれば真つ先に永野を襲わなかつたのはむしろ不思議」

「どうして？」

リンは、鼻息を荒くしながら答えた。

「だって。昔は人体つて世界一の神秘だと思われたのに、中身はただの高性能な機械じやないか。心臓はただのポンプだし血管だつてチューブに過ぎないでしょ。脳は高性能のコンピュータだし神経なんてハ

そこで、リンは言葉に詰まる。

「タカフミ」

「ん？」

「ふさいで、耳」

「ああ」

おえ、と耳にまとわづつく小さな声。

「本当はね、気持ち悪いんだ、この身体」

長い沈黙の後、リンは呟いた。

「こんな機械みたいな身体で、タカフミはよく気持ち悪いよね」

そりや、俺は患者じゃないからな。

……そうは、答えられなかつた。

「わかつて、いいんだよ別に。タカフミはまつとうだよ。私たちが幼いだけなんだから。知らないものがいつぱい詰まつてゐるようこみえたおもちゃ箱の中身を全部知つちやつて、それでダダをこねてるだけなんだ」

その言葉は嘘だ。

リンが自分のことを客観的に観察出来てゐるはずがない。自分のことを異常だと認識してゐるはずがない。

しているふりを、しているだけだ。

おそらく、彼女はこいつててゐる今この瞬間も、俺たちの方を異常だと思つててゐる。

「そうだな」

だけど、その詭弁は必要なことだと思つた。たとえ本音じゃないにしても、それで折り合ひをつけられるのなら。

「だからね、本当は……この駆動音をタカフミにとめてもうねつて思つたんだけど……やめたよ」

それで、心臓をえぐるその衝動を、とめられるな。

「ああ、それがいい」

リンを異常だと排斥し、家庭から締め出した両親は許せないが、同時にリンを生かしているのは、リンに自分は異常なのだという認識を押し付けている彼らだ。

それは、多分ありがたいことなのだろう。リンがいくつも苦痛だろうと、俺は彼女に生きてもらいたい。それは、あくまで俺の欲求として。

「リン……悲しくないか」

段々と暗闇に慣れてきたからか、リンがこちらの表情をうかがつたのがわかった。

それはどういう意味なのか、と聞いたげに。

「悲しくないよ。タカフミがこうして来てくれるから」「そうか」

「タカフミは？ 悲しくない？」

「まあ、リンが悲しくないなら悲しくないよ」

それは、全くの本心。その言葉に、リンはほくすりと笑った。
「不思議だよね。タカフミはそう言つて分かつてたよ、私。全然別の人間なのに、お互いのいろんなことがわかつちゃうんだ。本当に不思議だよね 兄妹つてさ」

まるで救いをみつけたようだ。

リンは、そう言った。

だけど、やはりその救いも嘘。だつて、俺はリンの気持ちなんててんてわからぬのだから。

兄妹とか関係なしに、単にリンの察しがいいだけなのだ。だけどそれを口には出さずに、俺はリンを抱き寄せた。

あまりに細くて、小さな身体。嘘と詭弁の残骸の上に成り立つている、今にも死んでしまいそうな生命。

「あつたかいよ、タカフミ」

だけど、俺はそれでもリンに生きてもらいたいと思つ。ひだらぬ思索抜きに、多分……そう思つてゐる。

いや、生きないといけない、彼女は。

服越しに、そっと、胸の下につけられた傷跡に触れる。

「……タカフミ、気付いてたんだ」

「ああ、一度とするなよ。女の子の体に傷がつくなーい」

「……はーい」

コンプレートなんて、してなかつたのだ。

彼女は、一番身近なものを排斥出来なかつた。

だが、それでいい。潔く死んでしまうことの何万倍も、苦しみながら生きていつた方が、よほど不合理で素敵だ。

俺は腕に力をこめた。

確かに温もり、肉の質感、香り。

いきてる、神秘。

「リン」

「なに？」

「胸、少しだけ大きくなつたな」

言い終わるや否や、お兄ちゃんのバカー、どべーで殴られる。派手に吹つ飛び俺。

仲良きことは、美しき哉。いや、妹にやましい気持ちなんて抱いてないデスヨ、全然。

「説得力ない！」

いらないだろ？、そんなもの。どうせ詭弁にすぎないんだから。

俺は生きている限りは許される範囲で、好き勝手やつしていくぞ。

俺はまだ大丈夫。兄妹なんていう儚い絆にすがつていられる限り。

そして、自分でつけた傷跡を暗闇に隠す程度の恥じらいを持つているなら、リンもまだ大丈夫だろ？。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7976s/>

世界は続くよ、どこまでも

2011年4月28日08時10分発行